
トーマス・マンとアグニス・E・マイアー (1)

洲崎 恵 三

日本語要約：

トーマス・マン (=TM) の14年間にわたるアメリカ亡命生活 (1938-1952) においてアグニス・E・マイアー (=AEM) (ワシントンポスト社主, 前 FRB 議長 Eugene Meyer 夫人) の果たした役割は大きい。Princeton 大学特別教授職, 国会図書館特別顧問の斡旋など, 経済的社会的な生活基盤を整え, その上に TM 老年の重要な諸作品が生み出された。しかし二人の友情関係は, 男女間の問題も含め, 激しく揺れ動く。その交錯の軌跡を往復書簡集と日記で検証する。「あなたへの愛は, 高度な芸を要する, いわば複雑なソロのダンスです。」手紙と日記の間の AEM 像の落差はどう考えるべきか? Kurzke や Harpprecht のように一方通行でしかなかったと取るべきか? それともこの関係こそ TM 晩年の創作エネルギーの根源とならなかったかどうか? 『ヨゼフ』のタマル, 『ファウストゥス博士』のフォン・トルナ夫人像に AEM は永遠化されている。Goethe の愛の対象が Lotte や Gretchen に永遠化されているように。

キーワード：出会い, AEM 略伝, プリンストン特別教授職と国会図書館顧問, 自制と誘惑, 愛のソロ・ダンス

序 王侯的アメリカ亡命生活

トーマス・マン (Thomas Mann, 1875. 6. 6 ~ 1955. 8. 26, 以下 TM と省略) は, 1938年 9月24日から1952年 6月26日まで, ほぼ14年間をアメリカ合衆国で過ごした。63歳から77歳までである。最後は Zürich 湖畔 Erlenbach の借家に戻り, 対岸の Kilchberg に終の棲家を見つけたあと, 血栓症で80歳の生涯を閉じた。内外の動乱の危機が次から次へと襲ったが, 創作活動は間断なく続けられ, 『ヴァイマルのロッテ』 (*Lotte in Weimar*, 1939), 『ヨゼフとその兄弟たち』四部作最終巻『養う人ヨゼフ』 (*Der Ernährer Joseph*, 1942), 『選ばれし人』 (*Der Erwählte*, 1951) など円熟の主要作品はアメリカで書かれた。なかでも1943年 3月15日から1947年 1月29日まで, Los Angeles (以下 LA) は Pacific Palisades の丘の上に新築した自宅で書かれた仮構の自叙伝『ファウストゥス博士』 (*Doktor Faustus*) は TM 人生総決算の書といえる。

それが母国ドイツとの永遠の別離であるとはつゆ知らず, 1933年 2月11日『リヒアルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大』 (*Die Leiden und Größe Richard Wagners*) 国外講演のため München を離れて以来, 5年半を南仏やスイスで亡命生活を余儀なくされていた。1938年 2月にはチェコスロヴァキア国籍を取得していたが, アメリカ国籍を法的に獲得したのは1944年 6月23日である。そのときの証

人となったのは先にアメリカ市民権を得ていた Max Horkheimer で戦後 Frankfurt 大学総長になる。Pacific Palisades では道一つ隔たった所 (D Este Drive, 13254) に住んでいた。『啓蒙の弁証法』の共作者 Theodor W. Adorno も近く (Brentwood, 316 South Kenter Ave.) にいた。その一章にと構想されていた現代新音楽理論が、音楽家を主人公とする *Faustus* 小説に不可欠のものとなり、Adorno が TM の枢密顧問官、いわば Mephistopheles の役割を演じたのは周知のとおりである。

異国での亡命生活は、土地屋敷も財産も職場もなく、作家であれば母国語の市場も失い、辛酸を極める。Hollywood 近辺でドイツ・コロニーを作り、新興映画産業などの余沢に与ったドイツ人芸術家たちや、大学などに職を見出しえた研究者たちといえども、「敵性外国人」としていつ首を切られるかもしれない不安定な状況に置かれていた。そのなかで TM ほど恵まれた生活を送った亡命者はいなかった。それはあらゆる面で「王侯のような」(fürstlich) 亡命生活であった。何より経済的心配の不要、Roosevelt 大統領に招待されるほどの社会的地位の評価、Alfred Knopf 社からの英語での作品出版の好調な売れ行き、デモクラシーや自作についてのアメリカ国内講演旅行のひきもやらぬ依頼、Harvard 大学初め多数の名誉博士号授与など、幸運の星の下にあったといっても過言ではない。

そのような恵まれたアメリカ亡命生活を可能にしたのは、何よりもアグニス・エリーザベト・マイヤー (Agnes Elizabeth Meyer, 1887. 1. 2~1970. 9. 1, 以下 AEM) 夫人と知りあったことにある。夫君は当時 Washington Post 社主、前 FRB (連邦制度準備銀行) 議長、後の世界銀行初代総裁 Eugene Meyer であった。

盲目の運命の女神たちが織り成す糸により、アメリカ亡命生活で結びあわされた TM と AEM の関係には、しかし、TM と Adorno の間にも一部あてはまるが、およそ人間存在の根源に根差す、光と闇、熱と氷、理想と現実、引力と斥力の交錯がある。

小論は、Hans Rudolf Vaget 編纂による TM ⇄ AEM 往復書簡、《Die Fürstin》を増補改稿したその「序文」、Klaus Harpprecht の TM 評伝 (1995)、Hermann Kurzke の TM 総合像 (『芸術作品としての人生』1999)、Herbert Lehnert のアメリカの TM 研究などに依拠して、TM のアメリカ亡命生活に対する AEM の寄与と、男女間の問題を含めた両者の複雑かつ魅力あふれる人間関係にやささかでも照明をあてうればという願いに基づく。

しかし分量の関係から今回は1938年から1942年夏頃の4年間を対象とし、あとの10年間と、今回触れなかった、TM の作品との関係、神話、Joseph, Goethe, Faustus 博士、ドイツとドイツ人問題、デモクラシー、非米活動委員会 (赤狩り) などのテーマとの絡みにおけるアメリカの TM 像と、AEM のかわりについては、次の機会にゆずることとする。

1. AEM の TM への貢献

AEM が TM に寄与した功績は次のとおりである。

第1に、1938年10月から1941年3月に至る、冬夏5学期計2年半にわたる Princeton 大学特任教授職の斡旋。

第2に、そのあと1941年から1944年に至る、合衆国国会図書館におけるドイツ文学顧問職の斡旋。これは後述するように1941年3月に引っ越したLAのPacific Palisadesで土地を購入し自宅を新築する資金としても考慮されたものである。しかも国会図書館に寄付されたMeyer家の資金によって可能となったものであった。

第3に、*Washington Post* や*New York Times* (=NYT) など全米の有力紙で、ジャーナリストとしてのAEMが書評や翻訳を通じてTMの名と作品をアメリカで紹介するのみならず、TM自身が論説等を寄稿する機会を提供し、TMの作品市場を拡大する力となった。

そのうえ、TMに関する一冊の本(『神を求める者』*The God Seekers*)を書いていたが、これは第2次世界大戦勃発によりAEMに課せられた社会活動繁忙により完成しなかった。しかしそのうち数章はYale大学Thomas-Mann-Collectionに保管されている。

第4に、TMファミリー(兄Heinrich、次男Goloなど)のフランスやスペインからの救出に、政府高官の力を借り、尽力し、成功した。身内ばかりでなく、ドイツからの亡命者仲間の救出や経済的援助も支援した。

第5に、長男Klaus Mann主宰の雑誌『尺度と価値』(*Maß und Wert*)や『決意』(*Decision*)の財政的援助をした。前者初刊にTMが書いた序文を英訳し、全米有力紙に掲載された。

以上羅列しただけでもわかるように、TMのアメリカ亡命生活の経済的基盤の確立、文筆活動の場作り、家族生活の環境整備に、AEMの果たした役割は大きい。とくにプリンストン大学人文科学特別教授職と、国会図書館ConsultantのちにFellow職斡旋は、TMのアメリカ亡命生活を支える二本の支柱となった。自己の創作が(とくに*Joseph in Ägypten*)AEMの心を動かしたとはいえ、AEMの支えたアメリカ亡命生活がTM後半の創作の基盤となり、そこから主要諸作品が誕生したことをみれば、いかにAEMとの出会いが重要であったかがわかる。

2. 往復書簡集

両者の重要な交友記録は1,000ページに近い浩瀚な往復書簡である。1989年時点で所収の全477通のうち、TMからAEM宛は363通、AEMからTM宛は99通、他の25通は妻Katja MannからAEM宛、残り10通はAEMからKatja宛である。往復書簡の量が両者間で約3.5倍の差があるのは、積極性や一方通行という問題ではなく、AEMのほうがTMの手紙を注意深く保存したからである。TMのほうは他の膨大な書簡や書籍雑誌新聞類の処分問題のほかに、相互関係の谷間のさい怒りや厄介という思いから破棄したりするなど始末してしまったようだ。後世の目も配慮したかもしれない。

1963年にErika Mann編纂になるTM書簡集全3巻のうち、AEMとの往復書簡は126通で、しかも.....によるいくつかの省略部分がある。現在刊行中の*Grosse kommentierte Frankfurter Ausgabe*中、書簡集は、2011年時点で第3巻1933年分までしか上梓されないの、1995年R.Vaget版に依拠するほかない。末尾に収録されたAEM2番目の自叙伝『チャンスと運命としての人生』(*Life as Chance and Destiny*)の最終章「運命の車輪の転回」(*A Turn in the Wheel of Fortune*)は、TM死後15年(1970年)に書かれた、TMとの友情関係の締めくくりの回顧録で貴重である。

400通を超える文通というのは、一般論として考えても、きわめて異例である。しかも幾頁にもわたる長文の手紙もかなりあり、愛情深い心のやりとりが少なくない。「私は他のどの人への関係よりも、より多くの思考、神経力、机上での仕事を、あなたとの友情関係に捧げてきました。」(TM → AEM, 1943. 5. 26)「植物が太陽を向いて回っていくのと同じように、私は TM の作品に顔を向けていった... TM の作品には、文体の音楽、心理的密度、形式の活力がある。幸福な少女時代に養われたプロテスタント的なドイツの文化感覚への郷愁... TM との文通は私の心を豊かにする影響をもった。この天才の道を探求するうちに、私は私自身の心の未発見の領域を旅することになった。」(*Out of these roots*, 185f.)「私にはときおり、さながらただあなたがこの異国でひとりの女性を見出す運命にめぐりあうために、私のこれまでの人生が神々によってひじょうに豊かに、多様に、ドイツ＝アメリカ的な伝統のなかで形作られてきたように思えてなりません。」(AEM → TM, 1942. 9. 4.)「あの頃の私は、あなたが私という精神的存在へ、愛情をもって、また苦勞しながら積極的に沈潜していかれることに、いつも感激し深く感謝していました。」(TM → AEM, 1955. 2. 9)

最も濃密な友情関係を結びえた AEM とはどのような女性だったのか。なぜ TM の人生に結びつけられ、どういう意味をもったのか。以下、Vaget の序文と AEM の自叙伝 *Out of these Roots* (1953) により簡潔に AEM を一瞥する。

3. アグニス・マイアー略伝

AEM の両親は北独生まれ。祖父 Karl Ernst は Hannover の宮廷付 Luther 派牧師だったが、1886 年(薩長連合の年) Preußen 公国支配下に入ったとき、プロイセン軍国主義憲法への宣誓を拒んだため、息子たちをアメリカに送った。父 Fredrick はその第 3 子で、New York (以下 NY) で法律を学び弁護士となる。1878 年 Bremen 出身の船員の娘 Luise M. Schmidt と結婚。AEM は 1887 年 1 月 2 日生まれで、4 人の子供の末子だった。父は民主党员で、演説に長けていたが、その才能は娘に開花する。AEM の『ブデンブローク家の人々』(*Die Buddenbrooks*, 1900) への共感、プロテスタント的エートスへの敬愛はこのルーツに根ざす。のちに非米活動委員会で赤狩りを狂信的に進めた McCarthy 議員への公然たる反対も、このドイツ的內面倫理志向的 Puritanism に由来するのかもしれない。

Agnes の生まれ育った Pelham Heights は、Manhattan の北東約 17 マイル車で 30 分ほどの所で、当時はまだ田園風景が広がっていたから、Agnes の自然への親愛、Walter Whitman (1819-1892) や Henry D. Thoreau (1817-1862) への愛読につながった。The Morris High School で外国語に秀でた AEM は、Columbia 大学に併合される有名な女子大学 Barnard College の奨学金を獲得。大学では John Dewey (1859-1952) の教えに心酔した。卒業後 New York Sun 紙初の女性記者となる。写真家 Edward Steichen の影響で彫刻への目を開き、ロダンに接近し、やがて中国絵画の著書 (1923) を出す。

1908 年から 1 年間ほどパリに行き、Sorbonne 大学大学院で芸術史を学ぶ。渡仏船上 Massachussets 保健大臣 Dr. Horrigan は Agnes を天使の顔と呼び、こんな利発で無垢な女の子に

出会ったことはないと言った。そういう魅力がこの23歳の乙女にあったのだろう。「若く魅力的であることは陶酔的なことだ。私ほど男性たちの崇拜によってこれほどとことん甘やかされた女はいないだろう。慌てふためいて私に惚れこまないようなら、ただ退屈だと思った。」(Roots, 57f.) AEM自身の言葉だ。サン紙への記事を書くため、Henri Matisse, Darius Milhaud, Gustav Mahler, Gertrude Stein 夫妻, Marie Curie などと知り合う。なかでも当時68歳だった Auguste Rodin に、モデルになることを強く求められが、断った。しかし親しい文通は続いた。Rainer Maria Rilke が当時出入りしていたが、ロダンはあまり評価していなかったと、AEMはTMに書いている。(cf. AEM→TM, 1941.9.26) リルケを取り巻く崇拜女性たちのありようにも総じてAEMは批判的である。TMと知りあう前AEMが深い友情関係をもった Paul Claudel の姉 Camille Claudel が Rodin の人生において演じた重要な役割について、どうやらAEMは知らなかったようだ、Vaget (18) は書いている。しかし、外交官 Claudel が日本大使となる前に中国勤務であり、彫刻を含め東洋美術への造詣も深かったこのフランス作家とAEMの間にロダンの愛人のことが話題にならなかったとは考えにくい。

パリから帰米後 Agnes Ernst は1910年1月12日、12歳年上の銀行家証券マンの Eugene Meyer (1875. 10. 31~1959. 7. 17) と結婚する。すなわちTMとは同い年で5ヵ月ほど年下。世界新婚旅行で日本に立ち寄り、大隈重信と会ったとき、Eugene が「なぜ日本人は西洋人が東洋文化を学ぶより早く西洋文明の成果を利用できたのか？」と問うと、「精神的知識を学ぶより物質的知識を学ぶほうが簡単だからだ」という答えが返ってきた (Roots, 97) と記しているのは面白い。Eugene の父 Marc Eugene は1859年17歳のとき California に移住、のちに LA のデパート所有者となり、さらに NY へ移って国際的に有名な Lazard Frères 投資会社の共同経営者となった。出身は Straßburg で、祖父はユダヤ教会役員会 (Consistorium) のラビ兼書記だった。Eugene は、Berkeley や Yale 大学、さらに Frankfurt や Berlin で経済、商学関係を学ぶかわら、国際的銀行業の経験を積んだ。Lazard に勤めた後、自分の証券投資会社を設立、40歳にして5,000万ドル前後の資産を作ったという。

AEM は、父の負債も返済してもらい、貧乏から裕福な生活に入りえた結婚生活を「最大の財宝」(Roots, 63) と呼んだ。しかし2児を生んだ結婚4年後「精神的糧の不足で私の内部の生命はさながら死に絶えそうです」(Eugene への手紙, 1914. 6. 25, Vaget, 24) という不安と不満に襲われ、1914年春一人でヨーロッパを再訪、旧知の人たちを訪ねるが、癒されず、夏、第1次世界大戦勃発直前に家族のもとに帰ってくる。精神的糧への飢えは、やがて Claudel や TM との出会いで幾分満たされることになる。しかし精神的飢えだけでない AEM の情念を含めた生の充実への希求心を TM は「ヴァイキングの血」(TM→AEM, 724) と呼んだ。Vaget は、AEM には冒険への傾向、因習的でないもの・危険なものへの大胆さ、感情の横溢がみられるが、これは父から受け継いだボヘミアンの気性である、父がアメリカへ渡り、借金もし、愛人ももっていたという汚辱の不名誉から、純潔な父を求めていた、それが後年教養ある年配の男性たちへの AEM の関係に現われているのではないか、と言う。(Vaget, TMS VII, 121)

1920年アメリカで女性参政権が成立。AEM は、Manhattan 北方 Westchester Country の共和党

トップ William Ward の徳憑により、高級住宅地 Whites Plains に Office がある新設の Recreation Commision 委員長職を1923年から41年まで務めた。任務は、公園など生活環境整備、初の青少年サマーキャンプ開設、音楽活動など文化生活の向上だった。

Eugene Meyer は、1930年9月16日から1933年5月10日まで、Hoover 大統領時代 FRB (連邦準備制度理事会) 議長となる。戦後は1946年 Truman 大統領時代、初代世界銀行総裁に任命される。1933年共和党 Roosevelt 大統領誕生のため、民主党員だった Eugene は辞表を提出。そのとき57歳だった。

AEM の勧めにより Eugene は、当時首都6紙のうちの1紙にすぎず倒産し競売にかけられていた *Washington Post* (WP) 紙を825,000ドルというきわめて有利な額で競り落とした。定期購読数を増大させ、ワシントン政財界への影響力を高め、New Deal 政策への監視の道具を手にした。現在のアメリカ2大新聞への飛躍は、しかし1960年70年代 AEM の3女 Katharine の夫 Philip Graham 時代に開花する。Kennedy, Johnson 大統領時代、White House との関係を深め、Newsweek 紙と合併した。1963年 Philip の自殺後、1969年以降 Katharine Graham が後継者となり、1972~74年の Watergate 事件の暴露により歴史的成果を上げることになった。カタリーネ・グラハムは、1998年自伝 *Personal History* (『わが人生』) で Pulitzer 賞伝記部門を受賞した。

AEM は Eugene と共同経営者・発行人であったが、ジャーナリストとしてインタビューやルポルタージュ、さらに巻頭社説も書いた。*Britain's Home Front* (1943) や *Journey Through Chaos* (1944) がその成果である。1937年 WP や NYT 紙に載った TM との対談、『エジプトのヨゼフ』書評、『尺度と価値』序文、『来たるべきデモクラシーの勝利』英訳などは、アメリカにおける TM 受容に大きく貢献したうえ、ジャーナリストとしての自身の評価も高まった。

4. 出会い

TM が AEM に初めて出会ったのは1937(昭和12)年4月20日、TM 3回目のアメリカ訪問時、NY でのインタビューのときである。TM 61歳、AEM 50歳。WP 紙はこの対談記事を4月25日掲載。4月23日 AEM は礼状として初めての手紙を書く。Liberalism はあなたをそのリーダーとして必要とし、その目的を表現するために言葉の偉大な天才を必要とし、芸術家としての高潔さを必要としている、精神的にも政治的にも。あなたの発言は、個人の自由を守ろうと闘いながら、より大きい正義を求めているこの国の我々を励ましてくれる。Fascist や Marxist がどう叫ぼうとも、Democracy の理性力は自由と正義が堂々と前進することを守るあなたの個人的リーダーシップを必要としていることを忘れないでほしい。TM は短い返報しか出さなかった。

Fan Mail の一つとみられたのだと思った AEM は、自己紹介と講演招待の手紙を送る。自分は Washington Post 社主兼発行者であり、前 FRB 議長 Eugene Meyer の家内です。Washington では3年に1度 Mrs. Bayard Cutting 主催で *Can Democracy survive* というテーマの講演会がある。前回は Cahrles Beard と Harold Laski 教授だった。来冬あなたの名前をサジェストしておいた。聴衆は政府高官や議員たちである。講演は主な新聞に載る。アメリカでは新聞は広報の最良の手段である。

もし招待が来たら好意ある配慮をいただければ幸甚である。あなたの意見発表機関として WP を考慮されてはいかがだろうか？ 大統領に至るまで毎日読まれているし、他の新聞へも同時提供できる。Democracy のための闘いはいままさしく重要性をましており、あなたのようなきわめて創造的な心は、私のようなジャーナリストにとっては、第 1 線の防禦です。(AEM → TM, 1937.5.15)

TM のアメリカ訪問は 4 回にわたり、5 回目に移住した。全部客船。第 1 回目は、1934 年 5 月 29 日から 6 月 9 日まで。59 歳の誕生日をそこで迎えた。船中で『ドン・キホーテとともに海を渡る』(Meerfahrt mit Don Quijote, 1935) を書く。Helen Low Porter 夫人英訳による『ヤコブ物語』(The Story of Jaakob) 発刊にあたり、その出版社社長 Alfred Knopf の招待によるものだった。このとき Willa Cather, Sinclair Lewis, その夫人 Dorothy Thompson などアメリカの作家たちと知りあった。

第 2 回目は、1935 年 6 月 19 日から 7 月 5 日まで。Albert Einstein, Ganzy などとともに Harvard 大学名誉博士号受賞のため。White House 詰め新聞カメラマン連盟会長 Anthony Muto の斡旋により、Roosevelt 大統領に招待され夫妻と晚餐を共にする。NY から首都への 1 時間 20 分の飛行機が TM 60 歳にして初めての飛行だった。

第 3 回目は、1937 年 4 月 6 日から 29 日まで。NY の The New School for Social Reserch の招待による。このとき、三つの大きな出会いがあった。一つ目は、Yale 大学学長で英文学者の Joseph W. Angell と知りあい、翌年の Yale 大学 Thomas-Mann-Collection 設立プランが話しあわれたこと。二つ目は、女性心理分析家で TM 関係文献蒐集家の Caroline Newton と知りあったこと。三つ目が、Agnes Meyer と知りあったことである。

1937 年 11 月 1 日 Katja → AEM 「戦争にならないにしても、民主主義諸国の没落はもはや押しとどめがなくなっているように見えますし、この大陸は間もなく人の住めないものとなるでしょう」。12 月 8 日 AEM → Katja 「ご主人がアメリカに長期間生活の本拠をおくなんて私には考えられません。しかしヨーロッパの反動的状況がご主人に大きな支障となる場合は、アメリカ移住の可能性をなぜ考慮なさらないのでしょうか？」11 月 27 日 TM 日記「午前中アメリカ講演の執筆。民主主義的理想主義。そんなものを私は信じているのだろうか？ ある役割にのめりこんでしまうように、その気になっているだけではないのだろうか。いずれにせよアメリカという世界に注意を喚起するのはむだではない。」

1938 年 1 月 11 日 AEM → TM 「Joseph in Egypt 書評を書いている。なぜか。あなたの政治的重要性は二義的なことで、一義的にはあなたの作品の美的価値にある、そのことをアメリカ人は、とくに西部でまだ十分にわかっていないと感ずるからです。この仕事は容易なことではありませんが、私が見た英語での批評はみな全く不十分であるという事実がもしなければ、取り組みはしないでしょう。」政治より文学創造が AEM には第一義だった。

5. Princeton 大学特別教授職斡旋

第 4 回目は 1938 年 2 月 21 日から 6 月 29 日まで約 4 カ月にわたる。NY のエイジェント Harold Peat 企画の *The Coming Victory of Democracy* アメリカ 15 都市巡回講演である。2 月 25 日 Connecticut,

New Haven の Yale 大学の TM 資料蒐集室開設式に出席。3月10日 Constitution Hall で講演。瀟洒な Meyer 邸 (1624 Crescent Place, Washington DC.) に宿泊。11日午前 Lincoln Memorial, The Freer Art Gallery などを見て、将来のことを話す。AEM はまず Einstein も1933年からいる高等学術研究所 (The Institute for Advanced Study) 所長 Abraham Flexner と交渉。うまくいっているという電報を受けたことが3月22日の日記にある。しかし実現に至らず Flexner は Princeton 大学長 Harald Dodds に依頼。3月21日講演旅行先の Salt Lake City, Utah で、アメリカ定住の決意を AEM に書く。講演旅行中オーストリア併合 (1938.3.13) により意気消沈している。他方こういふときにドイツ国境に近い Künsnacht にいないでこの講演旅行を引き受け、アメリカと関係を深めたのは幸運だと思っている。けだしこの破局を目前にして企てられたアメリカ定住のプランは、いまや固い決心となったからです。もう一度スイスへ戻れるだろうとは思ふことすらできません。Hitler が罰せられることもなくオーストリアに対する犯罪的進駐を行うことができ、近いうちにチェコスロヴァキアに対しても同じような侵攻をほとんど抵抗なく行うような状況である以上、ヨーロッパは私のような者にとってはもはや住むことはできない。そして心理的抵抗は全く度外視しても、スイスはもはや私に心理的安全を提供してはくれないだろう。2週間前まだイギリスに希望をつないでいたが、今は絶望的だ。「あなたの電報はそんななかでどんなに気が鎮まるものだったことでしょう。」TM 夫妻は Erika と4月1日から26日まで Beverly Hills Hotel Bungalow で静養。

5月8日 TM 夫妻が Princeton を訪問、Flexner 所長と Dodds 学長と夕食を共にしたが、Princeton 大学特別教授職決定経過はけっして簡単ではなかった。Vaget の序文第8章がその複雑な経緯を検証している。とくに大学教授の年収6,000ドル捻出が問題だった。Rockefeller 財団が3,000ドル拠出、5月9日に出願され20日に許可される。Dodds 自身同財団執行委員であった。2,000ドルは難民外国人研究者救済緊急委員会 (Emergency Committee in Aid of Displaced Foreign Scholars)。委員の一人が Eugene Meyer の義兄 Charles Liebman だった。525ドルは、大学校友からの寄付金、475ドルは学長自由裁量経費、合わせて年6,000ドルであった。

AEM はさらに Harvard 大学の James Conant 学長と交渉していたが不成立。TM は5月22日から Jamestown, Rhode Island にある Caroline Newton の別荘に逗留していたが、5月24日 Princeton 大学から公式の招聘状が届く。「針の転回」と同日の日記は記す。6月1日 Columbia 大学、22日 Yale 大学で名誉博士授与。6月27日 NY 北方60キロほどの自然に囲まれた Mount Kisco にある Meyer 家の領主的別荘 seven spring farms にお別れのため招かれ6月29日帰国乗船まで2泊。AEM は Princeton 教授職決定までの経過や、資金や、契約条件について、自分がイニシアティブをとった裏話を披露。「皆、私のお友だちなのだ。」(TB, 1938.6.27) 28日住居問題解決のため Meyer 家の Cadillac で Princeton へ。65 Stockton Street, Library Place。家主イギリス人 Midford。現在は Thomas Aquinas 文庫。家賃は月250ドル。家は、客間、広間のほか、寝室10、浴室5。ガレージに Chevrolet と新車2台分。その他ベッドカバーなど12、ナプキン24、茶器2揃い等の貸与も含む。「アメリカでは私にとってお金の心配はなくなったという基本的展望。」(TB, 38.6.27)

1938年9月13日 TM は Zürich の Schauspielhaus で別れの挨拶をし、*Lotte in Weimar* の August の章を朗読する。9月14日 Schiedhaldenstrasse を出発、Paris を経て Nieuwe Amsterdam 号で NY に着

いたのは9月24日だった。25日 Madison Square Garden のチェコスロヴァキア共和国救済大集会で約28,000人の聴衆を前に「Hitler は倒されなければならない！」と挨拶。9月28日 Princeton 着。ちょうど Sudeten 割譲を初めやがて同共和国消滅、第2次世界大戦勃発の誘因となる München 会談の日であった。

1938年10月3日 AEM → TM。今日の文化と世界の危機のなかであなたは何という偉大な重要な責任ある役割を演じておられることか。あなたは時代と永遠のために書いておられる。この暗い時代にあってはあなたに思いを馳せることだけが多くの人々に慰めと勇気を与えるだろう。11月14日『この平和』(Dieser Friede, München 会談について)を読んで褒め称えつつも、あなたの時間とエネルギーとがあまりにも政治的活動によって奪われているのではないかという気がかりを申しあげてよいか、創作活動が過度に中断されることからあなたは身を守らなければならない。この心配を AEM はつねにもっていた。

Princeton 大学での講義は以下のとおりである。

- 1) ゲーテの『ファウスト』(Goethes >Faust<) 1938. 11. 28-29, 39. 4. 26. 5. 3
- 2) ヴァーグナーの『指輪』(Wagners >Ring<) 39. 1. 17
- 3) ジークムント・フロイト (Sigmund Freud) 39. 2. 13
- 4) 『魔の山』入門 (Einführung in den >Zauberberg<) 39. 5. 10, 40. 3. 18, 4. 24
- 5) ゲーテの『ヴェルター』(Goethes >Werther<) 39. 11. 17
- 6) 私自身について (On myself) 40. 4. 10, 4. 17 (英語), 5. 2, 5. 3 (院生独訳)
- 7) トーニオ・クレーガー討論 (Diskussionen über Tonio Kröger) 40. 4. 11, 4. 18
- 8) 小説論 (The Art of the Novel) 40. 5. 9, 5. 10

6. 友情関係の軌跡

二人の友情関係は起伏激しい波線を描くが、その軌跡の一部を往復書簡で検証したい。

(1) 誘惑と禁欲

1939年4月11日招待に応じ TM 夫妻は、首都の Meyer 家を2度目の訪問、そこに6泊する。4月13日 AEM と二人、車で20分ほどの Virginia 州 Potomac 河畔に、滝と岩のある上流の谷への展望と田園風の優美さに包まれた Meyer 家の山荘(通称「魔の山」小屋 cabin)に行く。AEM は企画中の TM についての著作の序曲を朗読。そこで「友人に対する私の冷たい (kalt), 自然らしさ (Spontaneität) を欠く関係」を指摘される。「どうもこれは Hippe と関係づけられたもののようだ。」(TB 39. 4. 13) AEM の熱の入れようには誘惑の意志も秘められていたのは疑いないと Klaus Harpprecht は言う。(Hprt, 1078)

39年5月の Princeton 講義「『魔の山』入門」で TM は、Hans Castorp は「聖杯の探究者」だという。「聖杯は秘宝だが、人間性も秘宝である。けだし人間それ自体秘宝であり、すべての人間性は人間の秘宝に対する畏敬に根ざしている。」この原稿を読んで AEM は、自分の TM 論は自分自身の魂の救済にかかわっていることを言う。AEM は TM 本を『神の探究者』と名づけ Tolstoi や

Dostojewski と比較研究しようとしていた。「私は19世紀における独仏間の〈純粹の探求〉(quest for purity) を比較してみました。Schopenhauer, Nietzsche, TM 対 Rimbaud, Baudelaire, Verlaine の対比で、あなたが聖杯モチーフとして触れているものと同じものです——魔の山だけでなくあなたの作品や人生全体がまことにこの論文であなたが〈永遠の秘宝〉と呼んでおられる、絶対的純粹さ、永遠なるもの、真なるもの、善なるものへの絶えざる探究です。そしてこのことこそ、愛する友よ、私がなぜあなたについての研究に駆りたてられるかの理由です。自分自身の魂の救済がかかわっているのです。」そして自分の哀れな能力が TM の英雄的な努力をそれにふさわしい形で叙述するのは重荷でひるんでしまいそうだが逃れられない。「もし神秘的なものに手探りしてよいなら、告白しますが、私があなたを誘惑者としての女性への怖れから解放してあげるといふことと、私の念願成就とが同時に絡まっているのです。」どうかこの厚かましい気持ちに怒らないでほしい。ドイツ的禁欲は疑いもなく、高い才能に恵まれた Rimbaud を破壊した罪深いフランス的禁欲より高い、現世と魂の葛藤概念だろう。「しかし、恐れが完全に吹き飛び、完全な救済に導くような、もっと愛情あふれるより高い洞察も存在します。あなたは肉を言葉に変容させましたが、いま言葉を肉に変容するときに来ています。人間の魂を救済するために、神はまったく人間にならなければならない、という神秘主義的信仰は、それが真理であるからこそこのように長くキリスト教を魅力あるものとしてきたのでしょうか。この強迫観念 (Obsession) こそまさしく、私の内部に生じている魂の発酵と高揚の一部なのです。」(AEM → TM, 39. 5. 12)

TM はこれに対し、Hans Castorp が求めたものは純粹さ (Reinheit) ではない、彼も私も禁欲的な傾向などない、心をとらえているのは人間一般の問題ないし人間的教育が焦点であって、教育小説には教導も誘惑もある、Mme. Chauchat は誘惑的だが、Settembrini と同じ精神的意味でも誘惑である。女性のなかに誘惑者だけしか見ないという非難は座視できない。私の Potiphar の妻の像は、世界中からふしだらな誘惑女とみなされていた女性の名誉を情熱的に救ったものと認めてもらいたい。私のねらいは、特殊女性的なものではなくて、人間的なもの一般なのだ、と返報する。(TM → AEM, 39. 5. 13)

1939年3月3日 Michael が同級生 Gret Moser と結婚、次女 Monika もハンガリアの Donatello 研究者 Jenő Lányi と結婚。TM 夫妻は6月6日から9月18日まで第1回ヨーロッパ旅行。9月1日独軍のポーランド侵攻で、第2次世界大戦勃発の混乱のなか、9月12日 Southampton からごった返す Washington 号に乗船、18日 NY 到着というきわどさだった。11月 Katja の両親 Pringsheim 夫妻が Wahnfried 家の助力でスイスへ亡命。兄 Heinrich が女優 Nelly Kröger と結婚。3女 Elisabeth がかなり年上のシカゴ大学イタリア文学教授 Giuseppe Antonio Borgese と結婚。家族にも変動の年だった。

(2) 愛の欠如、冷気、血と肉

改訂版『大公殿下』(=KH) 評を NYT に書いた AEM は39年12月11日にこの作品には愛がないと手紙する。あなたの作品は一般に全く根源的なものがあり、あなたの人生そのものと深くかかわっている。あなたの存在と創作との関連がある自然的偉大さが KH には欠けている。第2部は作り

物の空気が感じられる。氷のような空気が吹き、私の骨身にしみるほどだ。その愛の物語に愛はない。デモーニッシュなカタルシスもなく、エモーショナルな解放もない、理性と社会的配慮とが優勢だからだ。芸術とは内的自由の外的形式であり実現なのではないでしょうか。ヨゼフはこの高められた国の王子でなくて何でしょう。養う人ヨゼフは passive に受け取るばかりではいけない、active に与えなければならぬ。世間の魂を救うためには、おのれ自身の血と肉を与えなければならぬ。あなたは自分をもう変えることはできないと仰った。しかしそれはそうでなくて、ゲーテのように83歳でも若くありうるということ、私たちは二人とも知っている。私の言っているのは、個人に向けられた愛のことではなく、人間の心のなかにある最も大きな解放する力、世界や人生への愛のことである。このような愛をあなたは部分的にしか知らない。なぜならあなたは人生そのものをなお怖れているからであり、あなたの心には死がなお声をひそめてその魔法の歌を歌い、この音楽がなおあなたのひそかな幸福であるからだ。「精神的にも倫理的にもあなたは断固として創作し人を助けることができる——人生に打ち勝つことをこれほど助けてくださったこの私よりほかにだれがこのことを知っているでしょう。〈神を愛する者は、その見返りの愛を求めない。〉という Spinoza の愛。生命と、すべて生命あるものを愛すること、これこそ死をくぐりぬけた者の最大の勝利、ヨゼフの最後のよみがえりではないでしょうか？ この言葉はけっして私の言葉ではありません。この言葉はあなたが私を導き入れてくださった国、そこでは美と自由と愛とが同一のものである永遠の国に由来するものです。」ここにも TM に対する AEM の愛の理想が仄見える。

さらに12月13日 *Lotte in Weimar* を、天才が天才によって見られ、肉と魂に再現されているという賛辞を AEM が送ると、TM は12月16日付「ヴァイマル小説のほんの一部であなたのようなひとがそんなに興奮していただけるとは、私の硬直した愛のない状態も全く絶望的ではないようです。創作する人間にとっていつも決定的な問題は、どういう状況にせよそこから何が生ずるかということです。ひとつだけ言えることは、つねに誠実に私はひとりの人間であろうと努めてきたということです。」(TM → AM, 39. 12. 13) 39年12月21日二人はいっしょに Metropolitan Operahouse で *Tristan und Isolde* を観劇する。

7. Pacific Palisades 自宅新築と国会図書館特別顧問

1940年7月5日から10月7日まで3ヶ月間を TM 夫妻は Biverly Hills の西 Brentwood, North Rockingham Avenue 441の借家で静養する。7月31日 Michael 夫妻に Friedlin 誕生。65歳での初孫だけに Opa としての愛情は大抵でなくやがて Echo のモデルとなる。9月23日次女 Monika 夫妻が London から脱出のため乗った City of Benares 号がドイツ潜水艦に撃沈され夫は溺死、妻は助かるが、その後精神的に辛い人生を送ることになる。兄 Heinrich と次男 Golo は消息も定かならずまだヨーロッパを転々としていたが、40年夏ピレネー山脈 (Les Pyrénées) を越えて Lisbon に辿り着き、ギリシア船 Nea Hella 号にて A. Döblin や Fr. Werfel と共に10月13日 NY に到着。この救出には AEM の政府高官を介した強い援護があった。長男 Klaus の *Decision* 誌、Golo 主催の *Maß und Wert* 誌にも援助の労を惜しまなかった。TM も Frank Kingdon の緊急救援委員会 (Emergency

Rescue Committee) に協力し多くの亡命者を助けた。

TM 夫妻は40年9月12日 Santa Monika に近い丘陵の San Remo Drive 1550 の土地を6,500ドルで購入する。「かくも不安定な時代に定住の住居を決めるのは得策かどうか気が重い」(TB, 41. 3. 3) 逡巡しながら LA 定住の決断をしたのは、1に、天候、トスカーナ風の明るさと乾燥風土、2に、Hollywood 中心にドイツ亡命者とくに芸術家たちのコロニーがあったことである。Bruno Walter, Bruno Frank, Fritzi Massary (娘が Frank 夫人で、オペレッタの花形), Franz Werfel (夫人 Alma は Gustav Mahler 未亡人), Lion Feuchtwanger 初め, Frankfurt 学派の人たちなどがいた。3に、ヨーロッパの戦乱から少しでも遠い西海岸ということもあったであろう。

1938年9月28日から1941年3月17日まで約2年半暮らした Princeton 時代に別れを告げ、Pacific Palisades は Amalfi Drive 740の借家に入ったのは41年4月8日である。約10ヶ月後1942年2月5日、近くの San Remo Drive 1550の新築の自宅に移り、以後1952年6月29日に Zürich に飛び立つまで約10年間、66歳から77歳に至る、実り多い晩年を過ごした。この自宅新築資金援助に AEM は TM の新しい活動ポストを仲介するという両者にとりまことに賢明なありかたで多大の貢献をする。

1941年6月21日独対口宣戦布告。政治経済情勢が悪化するなか建築資材の高騰などから Meyer 夫妻に家の新築は見あわせたほうが賢明と言われていたが、6月29日に建築契約に署名。建築費は2,000ドル。抵当権16,000ドル。土地代あわせ約24,500ドル。7月7日建築開始。8月25日 Bel-Air ホテルにきた AEM を新築現場に案内。長女 Florence (夫は俳優 Oscar) Homolka 夫妻邸で大夜会。「気骨の折れる女友達と別れの挨拶、この人は結局おそらくいつも〈幻滅して〉私から別れて行く。気の毒なこと」(TB, 1941. 8. 28)

1941年10月4日付 AEM → TM。世界や世間のことで神経に触ることがあるのではないかと、心配事が多すぎて内面的に脅かされているのではないかと、あなたや家族のだけか病気なのか、家のほうはうまく進んでいるか、あなたの女友達が何らかの仕方であなたの役に立ちうるだろうか、という手紙に答え、TM は10月7日付「大仰な手紙」(Staatsschreiben) (TB, 41. 10. 9) と日記に記された長文の重要な願望の手紙を3日間かけて書く。新しい安定、家の新築への欲求は、私の年齢、今日の状況では、向こう見ずな、わがままな愚行と思われるかもしれないが、自分の人生の自然のスタイル、習慣である。こんなことまで口にしてよければ、名誉博士号のようなコストのかからない敬意は与えるが、創作活動と密接にかかわる外的なことには無関心で、そのことに思い至らないのはなぜかとときどき自問する。その反対の例もないことはない。Hermann Hesse は Montagnola im Tessin に Bodmer 家の好意で家を建ててもらって、自分の私有にはしなかったが、いっしょに夫人と死ぬまで住んでいる。どうしてこの国である都市であれ大学であれ、たんに名誉欲からでも、We have him, he is ours と言うためにだけでも、似たようなことを申し出ようと思いついてくれないのだろうか？ Nobel 賞をもらった裕福な作家にはお金の心配はいらない？ 新築資金はローンで、家具も気に入るかどうかなどではなく高額すぎるのではないかどうかの検討が必要だ。私という小船は座礁しているわけではないが、離礁できるかどうか。いささか違和感のある言い方で、今書いている Joseph が体現している Hermes 的企業家精神の影響とお考えいただきたいが、要するに私は投資に値するとみなされてよい企業のようなものではないでしょうか？

10月13日 AEM → TM。財政状況について言及されて私はほっとした。すでにこのテーマについてお話ししようと実は思っていた。しかしその勇気がなかった。いまそうする権利を与えてくださった。われわれの間でこだわりなく話せるようになるまで待たねばならなかったのかもしれない。「もし私の精神的努力をあなたの意のままにさせていただけるのなら、私の所有するどんな物質的な資力をも自由にお使いになってなぜいけないのでしょうか？」

TM 特有の、美しい言葉と修辞法のヴェールを被せられてはいるが、意図が透けて見えなくはない、いなむしろおねだりのウインクと行ってさえよいであろうこの大仰な、国の文書に似た手紙に対して、AEM は賢明でエレガントで思慮ある対応をした。それが国会図書館における特別顧問 (Consultant) という、労少なくして (年1回の講演) 報酬のよい (年収4,800ドル) 閑職 (Sinecure) であった。AEM は1929年から Library of Congress Trust Fund Board 委員であり、図書館長 Archibald MacLeish は詩人、AEM の友人で、TM の崇拜者でもあった。41年11月1日 AEM と魔の山小屋の「暖炉のそばで夫人の仕事や大仰な手紙について話しあう。よく考えられた解決策。国会図書館、名誉コンサルタント、年俸5,000ドル。満足。」(TB,41.11.1) 1941年11月3日「あなたの洗練された考案の才に私は心から驚嘆いたしました。これ以上すばらしい解決は考えられません。私は芸術家ですから、あなたが与えて下さった形式に、その内容よりはるかに喜んでおります。アメリカやワシントンとのこの新しい象徴的な結びつきは、それと結びついている物質的安心を除いたとしても、ほんとうに私に深い満足を与えてくれました。」

しかしこの顧問年俸4,800ドルの出所が、国費からではなく、実は Meyer 財団の寄金からであることを、AEM は1942年1月25日の手紙で打ち明ける。「この年俸について一つ説明させていただいてよろしいでしょうか? <そう。それで十分よ> とまるで私が言ったようですが、そうではありません。いえけっしてそんなに冷たく計算して決められたものではありません。この額はすべて私が私財として所有しているものです。すなわちそれについては私が自由に裁量できるものです。もっと多ければ私にもよいのですが、しかし必ず反対もあるでしょう。今日の状況ではこれ以上やりようがありません。われわれの現実的關係にも理想的關係にも私は自分が与える必要のあるものはすべて与えます。」

これに対し TM、42年1月30日の返事「図書館報酬の性格と出所について明らかにして下さったことに私はひどく感動しておりますが、そこにはしかし多くの驚きと恥ずかしさが含まれています。そんなふうにしていただいたことはすばらしくありがたいことですが、それでもそうしていただいてよろしかったのでしょうか？」

TM が実際に行った国会図書館講演は以下の5つである。

- 1) 「ヨゼフ物語のテーマ」 (*The Theme of Joseph-Novels*, 1942. 11. 17)
- 2) 「戦争と未来」 (*The War and the Future*, 1943. 10. 13)
- 3) 「ドイツとドイツ人」 (*Germany and the Germans*, 1945. 5. 29)
- 4) 「今日の諸事件の光に照らしてみたニーチェの哲学」 (*Nietzsche's Philosophy in the Light of Contemporary-Events*, 1947. 4. 20)
- 5) 「ゲーテとデモクラシー」 (*Goethe and Democracy*, 1949. 5. 2)

1944年から身分はConsultant（顧問）からFellow（学術研究員）となり、1講義につき1,000ドル支払われた。Fellow 職は死ぬまで続いたが、手当は1944年末までだった。

8. 友情と軋轢

(1) あなたへの愛は高度な芸、ソロのダンス

1941年3月17日 TM 夫妻が Princeton を去るので、3月8日 AEM は別れのため Midford 館に一泊する。3月12日 TM 日記に「Meyer 夫人から容易ならぬ手紙が届く」とある。その手紙はないが、TM の返事がある(41.3.12)。「1日目はまだ手の届くところにいたが、2日目は心ここにあらずであったと言われるのは何のことでしょう。二日とも同じように私はあなたのいきいきした〈家を美で充たしてくれる〉存在によるこんでいました。しかし、好意を寄せる人たちにどうして嫌な思いをさせてしまうのか、自分ではわかりません。そう言われることは気分のよいものではなく、まことに悲しい。もし私が友人たちにそういう思いをさせているなら、私と結婚しているということは、いったい何を意味することになるでしょう。36年も苦勞せざるをえなかったかわいそうな家内のことを思うと、私の良心は掻き乱されました。ところで私はもう長らくこの世に生き永らえてきましたが、もう十分です。というのも私はときどき心から自分にうんざりしていて、自分に残されているのは、人に喜びを与え、生きるのを助けてあげるときに来ていると思えるからです。」

AEM は TM と直接会ったあといつも充たされぬ思いでいっぱいになる。1941年4月7日付け「魔の山小屋」からの AEM の手紙は有名である。

「あなたを愛することは、わが友よ、高度な芸です。だれでもやっつけられるというものでありません。——複雑なソロのダンスです。」(AEM, 41.4.7)

善意と愛情に満ちてはいるが求めるところも多いこの夫人について、TM 日記には「気の疲れる女友だち」(eine anstrengende Freundin) とか「精神の七面鳥」(eine Geist-Pute) といった表現がある。高ぶりやすい感受性をもつ女性と傷つきやすい神経質さをもつ男性の間には、起伏の多い感情と理性の波が交互に押し寄せてくる。

「わたしの唯一の満足は、Washington と LA の距離を感ずるというあなたの告白です。私たちの間の物理的距離がどんなに遠く離れていても、私はけっして遠く離れておりません。」(AEM, 41.4.21) 「私は人生を、そのドラマと危険のある人生をそれだけいっそう強く愛しさえます。最高のギリシア悲劇といえども今日の諸事件と比べれば見劣りするでしょう。あなたでなくてほかのだからこのような震撼する衝撃に太刀打ちできるでしょう？ あなたの魂の力への私の信頼は無限です。私自身の確信がこれほど大きいのは、未来はあなたであってHitlerではないことを学んだからです。——PS. 私の TM 本のモットーはゲーテの次の言葉になるでしょう。〈神性が働くのは生けるものにてあって、死せるものにはない。神性は生成し変身するものなかにあり、既成のもの硬直したものなかにない。それゆえ理性もまた、生成するもの、生けるものとかかわる神的なものへの傾向のなかにあり、悟性はそれに役立つ既成のもの硬直したものとかかわるのだ。〉これが私のテーマです。私の仕事と企画のすべてです。」(AEM, 41.4.25)

(2) 「すべてはむだだった」

「Meyer 夫人から愚かな手紙。Erika から聞いたところによれば、彼女は Claudel と関係があったという。私のほうもそうなるところだったろう。私の手紙が興奮した調子にならないよう注意しなければならない。」(TB, 41. 5. 19) 41年5月後半ごろの AEM の手紙数通が欠けているので正確にはわからないが、あわれな女友だちを見捨てたとか、一晩中眠ることができなかったとか、すべてはむだなくなったとか、AEM が悩み絶望的になっている様子が、TM の返報により伺われる。TM は、「あなたが悩み、絶望しておられるときのほうが、オプティミズムをひけらかし、私が(時代の情勢について)嘆くのは私らしくないと言われるより、私の心に近い」、9年間も世界の愚かさ、臆病さ、悲惨さをくぐり生きながら、いつときも自分の仕事や生活への勇気を失わなかった男を、精神的抵抗力に欠けているなどと言わないでくださいと、抗議する。(TM → AEM, 41. 5. 26)

AEM は同じ日付で、どうやら私が心の最良最善を尽くしてあなたを支援しようとする気持や、あなたの精神の力で自分を養い支え、正しい姿勢を保とうとする気持、オプティミズムをひけらかしているとすれば、あなたももっと落ち着いて仕事を続けることができるようにするために、明るく、成就ないし計画されたことを強調して、重荷を軽くしてあげたいと思った気持が伝わらずに、あなたには精神的な抵抗力が欠けているという印象を与えてしまった。「ふつうなら讃嘆してもらえるはずのまさしくその点で私があるあなたの心を傷つけてしまったからそれだけいっそう自分の自尊心も傷つけられています。ともかく私のしたことは許されないことだと感じています。異常な涙が眼にあふれ、これ以上書くことはできません。——すべてがむだだったのですね」(AEM → TM, 41. 5. 26)、と書いている。(傍点筆者)

TM は「Meyer 夫人から絶望的な手紙、私が以前に出した手紙のある種のきつさが原因。宥めの夜間割引電報が必要。」(TB, 41. 5. 28) と記し、「びっくりして悲しい。あなたに苦痛を与えようなどという意志は露ほどもなし。すべては誤解。」と打電。(TM, 41. 5. 28)

「私の重荷は、あなた自身の重荷がこれによって高められる域まで、あなたは十分ご存知です。それだけに、そのような重荷がときに生み出すいらだちや、二人のどちらのせいでもないいらだちに、私が十分用心せず、あなたの気持ちを傷つけてしまったとすれば、いっそう許しがたいことです。あなたのような心の大きな度量のある人に対してまったく詫びることもできないような表現のきつさ (die Schärfe des Ausdrucks) には気を配ってきたつもりです。お互い寛容な態度でと願うことは虫のよい話でしょう。と申すのも、寛容を願うべきは私のほうですから。それでも私はあなたの妹のような理解を当てにしております。あなたはメランコリックなときにメランコリックな手紙を書かれ、同時にそう書いたことを詫びておられる。「反対です！ あなたが悩んでおられるときこそ、あなたは私の心に最も近くおられるのです。」と私は返事しました。これこそ私の対応の核心であり、真の素朴な考えです。〈すべてはむだだった〉と叫ばれる理由はあるでしょうか？ この〈すべてはむだだった〉を否定するために、わたしの心のなかのすべてが抗い闘っていることで充分なのではないでしょうか？ 私にはさながら私の美しく大きなエジプト製のハンカチであなたの涙を拭いてあげているような気がします——こんなことを言うと、あなたは心のなかでは笑っておられるのが見えるようですよ。』

41年6月2日 AEM は魔の山小屋で下書きを書く。「なんと気が楽になったことでしょう！ あなたのやさしい理解あるお手紙のおかげで私はふたたび自分自身を見出す道を見つけることができました。やっと理性が平衡を取り戻しつつあります。あなたの文体のどんなニュアンスも知る心には、それだけ深くあなたの表現のきつさが切りこみます。あなたの冷たい厳しさ (die Härte) の基盤を知っているのだけれども、そうなのです。あなたのあたたかさを知る者はまた、あなたの深い性質からときおり由来する冷たい特性 (einen kalten Zug) を、それにとくに悩まないように覚悟しておかねばならない、と私はいつも自分に言い聞かせてきました。この知恵は役立つのでしょうか？ まったくなしです。次回からはユーモアをもつよう心がけます。あなたに対して私は防ぎようがないことがわかりました。怒りとか呪うとか報復などという荒々しい感情の動きなど私にはありません。あなたは望むがままであることができます。私にはすべてそれでよいのです。これはまことにこみいった親愛関係であって、寛大な対応を願うことを私に禁じてさえいるものです。そうするのはただ私が、私の個人的な人生をこんなに豊かに美しくしてくれている自由と安定をあなたに対して失いたくないからです。そしてそれは私の仕事に不可欠なのです。」

下書きは整えられて6月4日付の返報となる。「すべてはむだだった」という私の言葉は——そのときは直観的な苦痛の叫びでしたが——今まで存在した最悪の状態でした。調和のある音楽を奏でることに欠けるときは私は愚行をします。瀕死の Tolstoi のように、一人で、途方に暮れて、苦しみに包まれて。「私たちの親愛関係に何の条件もつけません。もっともひそかな考えのなかでもあなたには何の非難もしなかったように。あなたはあるがままであって、それで私はよいのです。これからはユーモアを忘れないようにしましょう。私の人生をこんなにも豊かに美しくしてくれた自由と安全をあなたに対して失いたくないからという理由からだけであっても。それこそ私の仕事にとって不可欠なのです。すっかり酔いがさめても変わることはない友情と尊敬の気持ちは最大です。あなたの誕生日 (TM 66歳) に対し、あなたがあなたの Agnes に天候がよいときも悪いときも信頼を置くことができるということ以上に、何も言うことはできません。」(AEM → TM, 41.6.2~4)

*

自分の魂の導き手として仰ぎ見、女性らしい血も涙もある愛情をもって近づく AEM にとって、TM の自己防御の堅さ、自制心の鎧は、石のような冷厳さと感じられたようだ。人間的なものを表現するには温かい感情を滅した冷たい超人間の存在ないし非在でなくてはならないというあの有名な Tonio Kröger の芸術家観は、やがて愛する者は死す運命にある Adrian や、知の悪魔の冷気として現代の Faust 像に作品化されることになる。しかし TM は、手紙と日記の間の急峻な落差にもかかわらず、自己の作品の最も良き理解者として AEM に感謝し、起伏をくり返しながらかの友情関係は終生間断なく続いた。次回は Miramar Hotel & Bungalows での Potiphal 夫人と Joseph の場、Paul Claudel をめぐるやりとりのなかで限界までに達する友情の亀裂と修復の軌跡を追う。

(すぎき・けいぞう つくば国際大学非常勤講師)

Text:

Hans Rudolf Vaget (Hg.) 1992: *Thomas Mann-Agnes E. Meyer Briefwechsel 1937-1955* (=Vaget)

S. Fischer, Frankfurt am Main (=FrM)

Agnes Elizabeth Meyer:

1953 *Out of these Roots. The Autobiography of an American Woman* (=Roots), Boston

Arno Press, A New York Times Company, New York 1980年版による

1970 *A Turn in the Wheel of Fortune* In: *Life as Chance and Destiny* (Vaget, 803-811)

Thomas Mann:

1974 *Gesammelte Werke in 13 Bänden* (巻数のみローマ数字), S. Fischer FrM

1965 *Briefe* III (1948-1955) Hg. von Erika Mann, FrM

Tagebücher (=TB): 1981 (TB 1937-1939), 1982 (TB 1940-1943)

参考文献:

Hermann Kurzke 1999: *Thomas Mann Das Leben als Kunst* C. H. Beck, München

Klaus Harpprecht 1995: *Thomas Mann Eine Biographie* (=Hpr) Rowohlt, Reinbek/ 岡田浩平訳2006『トーマス・マン物語』(2) 三元社。こなれた日本語訳で読みやすい。大いに参考にさせてもらった。

しかし TM 日記をはじめ TM 関係文献はすべて拙訳である。

Thomas Mann Studien (= TMS)

H. R. Vaget 1987: *Die Fürstin. Ein Beitrag zur Biographie des späten Thomas Mann* In: TMS VII

Herbert Lehnert 1964: *Thomas Mann in Princeton* In: *The Germanic Review* 34, S. 15-32

Thomas Mann und Agnes E. Meyer (1)

Keizo SUZAKI

Résumé(English):

In Th. Mann(=TM)s exile in America(1938–1952)played Agnes E. Meyer(=AEM)an most important role, particularly through her efforts to find a professorship at the Princeton University and the position as consultant and fellow in the Library of Congress, what established TM's financial life in USA. In their correspondence can be found sometimes conflicts and piece. Did TM love AEM, while she loved him? Was her love to him a complicated solo-dance? Was this friendship then unfruitful? I think the mutual relationship of both souls was such a creative source of a productive energy to TM's late works as in the portrait of Tamar in *Joseph* or Lady von Tolna in *Doktor Faustus*.

Keywords: encounter, AEMs career, Professorship in Princeton und Consultant in the Congress-Library, cold and warm, Solo dance of love

Resümee (Deutsch):

Beim Th.Mann(=TM)s Exilleben in Amerika(1938–1952) spielte Agnes E. Meyer(=AEM) eine größte Rolle, vor allem durch ihre Bemühungen um seine Einstellung zur Gastprofessur an der Princeton University und zum Consultant und Fellow an der Library of Congress, was TM die finanzielle Grundlage in den USA legte. In den Briefwechseln zwischen beiden finden sich aber manchmal Konflikte und Frieden. Liebte TM AEM nicht, während diese jenen liebte? War ihre Liebe zu ihm ein komplizierter Solo-Tanz? Also war diese Freundschaft unfruchtbar? M. E waren die inneren Beziehungen beider Seelen eine tiefe, fruchtbare Quelle der schöpferischen Energie zu TM's späteren Dichtungen wie z.B. im Bild Thamar vom *Joseph* oder Frau von Torna im *Doktor Faustus*.

Schlüsselwörter: Begegnung, AEMs Lebenslauf, Proffesur. an Princeton und Consultant in der National Bibliothek, Entsaugung und Verführung, Solotanz der Liebe